

一般の部

最優秀賞

爺の泣き虫コロッケ

中尾 則幸

「おやじ、お土産はいらないから今年は、あのコロッケを作ってくれない?」

千葉の次男から札幌に住む私の所に、電話が入った。

「しばらく作っていないから大丈夫かなあ」と、ちよつぱり不安になる私。

「おふくろのあのノート、もう棄てたの?」「いや。あれは、お守りだから、まだ手元にあるよ」と答え、北海道産のじゃがいもと玉葱たまねぎに人参にんじん、それに豚のひき肉も宅配便で送ることにした。

あのノートとは、二十四年前に亡くなった妻が私に書き遺した「お料理ノート」の事で

ある。大学ノートの表紙にマジックで書かれたその文字もシミだらけで薄汚れている。

それは闘病中の妻が病床で、夕食と弁当用のレシピを書き留めておいたものだ。

カレーライスに始まって、豚汁、肉じゃが、煮込みハンバーグ、そしてコロッケ……。

特にコロッケはかつて我が家の人気ナンバーワン、妻の定番料理だった。

妻が最後に入院したのは平成十二年。その前の年に長女は嫁いでおり、我が家はサラリーマンの長男と高校一年の次男、そして私の男三人の生活に変わった。妻の気がかりは、食事や高校生の息子に持たせる弁当のことだった。

「パパ、ヒロのお弁当、無理しなくてもいいのよ。冷凍ものをレンジでチンすればいいし。何だったらコンビニで買ってもいいしね」と妻は言う。

「うん、わかった。でも少しはこの手で作って

みるよ」と強がりと言ったものの、料理の経験など殆どなかった私には戸惑うことばかりだった。とりあえず妻から簡単なレシピの説明を受け、それをメモにして台所に立つことにした。

仕事帰りに病院に立ち寄り、スーパーマーケットの買物レシートを見せると妻は喜んだ。

「あら、きのうは豚汁にしたの？」

「どうして。わかるの？」と私が訊く。

「だって、ゴボウとコンニャクも買っているでしょう」と妻は、まるで謎解きの私立探偵のように得意気に笑みを浮かべた。

妻が入院して半年が経った。

病状は乳がんだったが骨に転移、さらに肝臓にまで襲いかかった。主治医からは余命三ヶ月と宣告されたが、私は「奇跡」を信じ妻にも子どもたちにも、その事を隠し通した。

結婚してちょうど二十五年。仕事の虫とか夜の帝王とか言われ妻や子どもたちに笑われた私が、〈家庭〉に目を向けるには余りにも遅

すぎた。大事なものがこの手から突然こぼれ落ちそうになって初めて気づく。掌で過去の時間を掬ったら悔いばかりが残った。

かつて看護師だった妻は、入院先の院長先生から同じがん病棟の若い患者さんの心のケアを依頼された。「奥さんと一緒なら頑張れる」と、患者さんからのたつてのお願いだという。私は妻に「免疫が下がるし、今は自分の治療に専念してほしい」と反対した。

私の妻とて明日をも知れない命なのだ。

しかし妻は、その役を敢えて引き受け大部屋から二人部屋に移った。

ある日、間仕切りのカーテン越しに二人の歌声が漏れ聞こえてきた。坂本九の「上を向いて歩こう」だった。

——上を向いて歩こう。涙がこぼれないように……。私は病室の陰で、こみ上げる鳴咽をこらえた。

妻は「覚悟」を決めていたのかも知れない。頸部をコルセットで固定された体を起こし、

何かに憑よられたように「お料理ノート」にボールペンを走らせた。

病床にあっても私の妻は、何事にもプラス思考で笑顔を絶やさなかった。

その姿が、かえって私を苦しめた。

へせて息子が高校を卒業するまで、妻に時間を与えて下さい〜神様に掛けたその願いは届かなかった。

札幌に初雪が降った十月下旬、妻は五十一歳で旅立った。目頭にうつすら涙を浮かべて……。

初七日の夜、火の消えたような我が家で私は手間のかかるコロッケを初めて作ることにした。会社の仕事を早めに切り上げて、妻が愛用していた赤いエプロンに腕を通した。

ノートに記された手順を追って玉葱をみじん切りにする。匂いが鼻孔を刺激した。涙がじわっと滲にじんできて、レシピの文字がぼやけて見える。

この日の〴〵おやじのコロッケ〴〵は無残な姿

だった。ひび割れして表面は、まるで噴火口のようなではないか。彼女ならきつと、こう言うだろう。

「じゃがいもの粉吹きをわすれたの？油の温度が低すぎなかった？」そうかも知れない。サラリーマンの長男は「見てくれは悪いけど、母さんの味だよ」と私を氣遣う。

高校生の息子は「これ、マジで弁当にも入れるの？」と訊いた。

「いやならいいんだ。コンビニの弁当、そんなにうまいのか」

私は声を荒げた。次男のヒロは「ふうん」と言っただけ、私の〴〵苦心作〴〵を無言で口に運んだ。

あの日から二十四年。表紙がボロボロになってしまった〴〵お守り〴〵のノートを持参し、千葉の次男宅を訪ねたのは令和六年、年末の十二月二十九日だった。

「じいじ、待っていたよー」小学三年生の孫娘

が声を弾ませて迎えてくれた。

「じいじのお手伝い、ひなこもガンバル」と言
って、チューリップのアップリケをあしらっ
たエプロンを自慢げに見せてくれた。きつと、
ひなちゃんのママがこの日のために手作りし
たのだろう。

私はいつの間にか後期高齢者となり、まも
なく八十に手が届く。長い間、札幌で独り暮
らしをしているが、可愛い孫娘と台所に立て
るなんて、こんな嬉しいことはない。

息子に気づかれないように、妻のスナップ
写真を上着の胸ポケットにしるばせへさあ、
頑張ろう！と自分に言い聞かせた。

「おやじのコロツケ、久しぶりだなあ。今夜は
コロツケパーティだ」と次男のヒロ。

どうやらみんな楽しみにしていたらしい。

コロナ禍のため三年ぶりの再会だった。

久しぶりに爺のコロツケを振る舞う。手順
は頭に入っているが、持参した妻の「お料理
ノート」をテーブルに広げる。これが若くし

て逝った彼女に、どうぞ見守って下さいとい
う「儀式」になった。インクが滲み、醤油と
油でシミだらけになったノート。妻の思いが
こもった、かけがえのない「形見」である。
皮をむいた道産のじゃがいもと人参を茹で、
粉吹きにする。スツールを踏み台にした孫娘
の手を取り、一緒にマツシヤーでじゃがいも
をつぶす。

「よいしょ！よいしょ！」

そして玉葱はみじん切りに。今度は涙目を何
とかクリアした。

「ひなこ、もう少し大きくなったら一人でも作
れるようになりたいの。そうしたら、じいじ
にも食べさせてあげる」孫娘の、そのやさし
い気持ちに、「ありがとう」とこたえたもの
思わず涙がこみあげてきた。

ひなちゃんはパン粉づけの手をちよつと止
め、「じいじは泣き虫さんだね。でも、うちの
パパはちがうよ」と言って胸を張った。

その言葉に初雪のあの日、心の支えだった母を喪った息子の姿が甦った。

布団をかぶって声押し殺し泣いていた、まだ十六歳の少年だった。

私は息子が卒業するまでの二年余り、母の味を絶やしてはならない、と毎日台所に立った。そして早朝から、慣れない弁当づくりで格闘がつづいた。その弁当もいつの間にか冷凍ものが姿を消し、おやじのオリジナルで占められるようになった。

「おやじ、コンビニの弁当よりうまくなったよ」

「バカ。今更、お世辞を言うな」――。
そんな会話を交わしながら、高校生最後の弁当もコロッケにした。

春の粉雪が舞い落ちる中を、小走りですバス停に向う息子の後ろ姿を窓越しに見送った。

あの時、まだ高校一年生だったわが子の行く末を病床の妻は、どんなに案じていたことだろうか。

その次男のヒロも今は公務員で四十歳。二人の女の子の父親になった。下の子のかほちゃんも四歳。テーブル越しに、じいじとお姉ちゃんのコロッケ作りをじっと見ている。

この孫娘二人が今度は、じいじの味として、この先につないでくれるのかも知れない。そんなことを想像するだけで、元気になる。高温の油がチリチリと音を立て、香ばしいにおいが漂ってきた。油を使う最後の仕上げは爺の仕事だ。

「さあ、完成!!」「やったあ!!」

ひなちゃんがパチパチ手をたたくと、妹のかほちゃんも真似をする。孫娘二人の顔が輝いている。

この日、息子の家族四人とコロッケが主役のテーブルを囲んだ。

「ひなちゃんのコロッケ、すごくおいしいよ」と言っ
て母親のみさこさんが、わが子の頭を撫でた。

「ひなちゃん。泣き虫さんのじいじを助けてく

れてありがとう。がんばったね！」

褒め言葉をかけて、二人でグータッチ。ひなちゃんは満面の笑顔になった。

「おやじ、これだよ。これ。おふくろの味、ちほさんの味はこれだよ」

そう言った息子のヒロの目頭が、心なしか潤んでいるようにみえた。

ちほさんの味かあ。その言い草には参ったよ。ヒロも大人になったなあ――。

これまで曲がらずに育ってくれた息子の顔をしみじみとながめ、私は胸が熱くなった。おいしそうにコロツケを頬張る二人の孫娘の姿を、せめて一度でいいから妻に見せてやりたかった。それが叶わなくても、ちほさんから爺へバトンタッチされたコロツケの味は、孫たちへの記憶の中にも残っていくことだろう。

私は胸ポケットの妻の写真に、そっと手を取り心の中で語りかけた。

「ママの遺した『お料理ノート』は生きていま

す。爺の泣き虫コロツケは、みんなの笑顔に変わりました」――。

(北海道札幌市)